

会長および評議員選挙公示

選挙管理委員長 高宮 正之

日本植物分類学会は設立から10年を過ぎ、この間に会員数も増加して顕著な発展を遂げました。これも、これまで学会運営を担ってこられた会長及び評議員を始めとする役員皆さま方のご努力の成果でありましょう。本年は次期10年のスタートに当たる会長・評議員を選ぶ年です。学会会則第12条及び役員等の選出についての細則に基づき、2011-2012年度の会長・評議員の選挙を下記の通りに行います。学会の舵取り役を選ぶ大事な選挙です。学会員の権利である大切な一票をぜひ投じてください。投票締め切りは2010年9月30日(木)です。

なお、会則第13条3で定められている、役員の大任期間に関する制限が適用される方は以下のとおりです。これらの方には被選挙権はありませんので、投票用紙に記名されても無効になりますのでご注意ください。

会長の被選挙権なし：該当者なし

評議員の被選挙権なし：黒沢 高秀, 田村 実, 永益 英敏, 西田 治文, 野崎 久義

5名の評議員の皆さま、連続2期4年間お疲れ様でした。

選挙実施細目

1. ニュースレター本号に綴じこまれている選挙人名簿をご覧になり、同封の会長選挙投票用紙(ピンク)に会長候補者1名を、評議員選挙投票用紙(緑色)に評議員候補者8名以内を、それぞれ記入してください。
2. 記入後、投票用紙を二つに折り、同封の料金受取人払郵便の封筒に入れて、切手をはらずそのまま郵送してください。封筒には、住所・氏名を必ず記入してください。
3. 封筒が同封されていないか、あるいは紛失した場合には、「会長・評議員選挙投票用紙在中」と朱書きした任意の封筒で郵送してください。申し訳ありませんが、その場合切手代はご負担ください。なお、投票用紙の再発行はいたしません。
4. 投票締め切り 2010年9月30日(木)(当日消印有効)
5. 開票日時・場所 2010年10月8日(金)午前11時
熊本大学大学院自然科学研究科 高宮研究室
会員2名以上の立ち会いのもとに開票します。会員はどなたでも開票に立ち会うことができます。立ち会いを希望される場合は、事前に選挙管理委員長までご連絡ください。
6. 規程の数を超えて候補者名を書かれた場合、その票自体が無効となります。また、会員以外の候補者名を書かれた場合には、会員以外の部分のみが無効となります。
7. 同姓、あるいはよく似た名前の会員がおられますので、投票にあたっては、ニュースレター本号掲載の選挙人名簿をご参照のうえ、氏名を略さずお書きください。

投票用紙送付先・連絡先

同封の料金受取人払郵便封筒を用いてください。

別の封筒を使う場合や連絡は以下にお願いします。

〒 860-8555 (郵便番号が料金受取人払郵便封筒とは異なります)

熊本市黒髪 2-39-1 熊本大学大学院自然科学研究科理学専攻

日本植物分類学会選挙管理委員長 高宮 正之 宛

Tel & Fax: 096-342-3428 E-mail: lycopod@aster.sci.kumamoto-u.ac.jp

諸報告

庶務報告 (2010年5月～7月)

庶務幹事 東 浩司

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

・環境省による平成22年度絶滅危惧植物の分布状況等調査業務に参加希望書を提出した(6月28日)。

お知らせ

2010年度日本植物分類学会賞

(学会賞および奨励賞)の受賞候補者の募集

会長 戸部 博, 学会賞選考委員長 村上 哲明

以下の2つの賞の受賞候補者を募集します。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の積極的な応募・推薦を期待しております。

「日本植物分類学会賞」：植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められたものに授与する。受賞者の資格は、「日本植物分類学会賞」については10年以上継続して本会会員である者とする。

「日本植物分類学会奨励賞」：受賞年の4月1日において満38歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な研究者(学生を含む)に授与する。受賞者の資格は3年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している者とする。

募集要領

他薦の場合は、推薦する候補者の氏名と推薦理由、どちらの賞に推薦するかをお知らせください。自薦の場合は、(1)どちらの賞への応募か(2)略歴(生年月日、学歴、職歴など)(3)調査・業績の概要(4)業績リスト(論文、著書など)と本学会の大会での発表記録をワード・ファイルあるいはA4用紙に記入して(書式は自由)お送りください。自薦、他薦を問わず、さらに必要な資料があれば、学会賞選考委員会から候補者の方に提出を依頼します。応募は、e-mailまたは郵便でお願いします。

- ・書類送付先：〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 牧野標本館
村上 哲明 宛 e-mail: nmurak@tmu.ac.jp
- ・応募締め切り日：平成22年9月30日
- ・その他：両賞の受賞者は平成23年春の日本植物分類学会大会(つくば)において表彰されます。また、同大会において受賞講演を行っていただくことを原則としております。

2010 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 篠原 渉

平成 22 年度の日本植物分類学会講演会は、大阪学院大学の林一彦先生に会場をお世話頂いて、次のとおり開催します。演題など詳細につきましては次号のニュースレター (No. 39) でご案内いたします。

【日時】2010 年 12 月 18 日 (土) 午前 10 時～午後 4 時 40 分

【講演会場】大阪学院大学 2 号館地下 1 階 2 号教室 (02-B1-02 教室)

〒564-8511 大阪府吹田市岸辺南 2 丁目 36 番 1 号 (電話: 06-6381-8434)

【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅, 阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩 5 分。

http://www.osaka-gu.ac.jp/p_student/index.html の「キャンパス案内」から「交通アクセス」をご覧ください。

【予定講演者】

川瀬 大樹, 川北 篤, 布施 静香, 嶋村 正樹, 星野 卓二

日本植物分類学会第 10 回大会 (2011 年) のお知らせ

日本植物分類学会第 10 回大会準備委員会

日本植物分類学会第 10 回大会は以下の通り開催する予定です。なお、今回は大会開催 10 周年を記念して、日本・中国・韓国国際シンポジウム 2011 「東アジアの植物多様性と保全」を同時開催します。したがって大会の一般発表は、口頭発表はなくなり、ポスター発表のみとなります。ポスターはこれまで通り日本語でも可能です。ただし、国際学会を兼ねるために、今後活躍の期待される若手には出来る限り英語のポスターとすることを推奨します。会の詳細および参加申し込みなどのご案内は次号のニュースレター (11 月号) でお知らせします。

1. 主催等

共催: 日本植物分類学会・筑波大学

後援: 国立科学博物館・つくば市教育委員会

2. 会場 筑波大学 大学会館 茨城県つくば市天王台 1-1-1

3. 日程
- 3 月 18 日 (金) 編集委員会, 評議員会 (於: 国立科学博物館植物研究部棟)
 - 3 月 19 日 (土) 日中韓 3 国国際シンポジウム, ポスター発表など
 - 3 月 20 日 (日) 日本菌学会との共催シンポジウム (午前), ポスター発表, 総会, 受賞記念講演, 懇親会, 外国人向け植物園ガイドなど
 - 3 月 21 日 (月・祝) シンポジウム「日本の固有植物」(午前), 分類学会公開シンポジウム「植物の進化」(午後)

日本植物分類学会第 10 回大会準備委員会: 国立科学博物館植物研究部内

連絡先: 茨城県つくば市天久保 4-1-1 岩科 司

Tel: 029-851-5159, Fax: 029-853-8998; e-mail: biodiversity@kahaku.go.jp

(大会専用のメールアドレスは次号のニュースレターでお知らせします。)

寄稿

学名のラテン語 (6)

永益 英敏 (京都大学)

学名に使われる記号

分音記号

現在の規約のもとで学名に用いることのできる文字は英語のアルファベットと同じラテン文字 26 文字であることは前回述べた。

発音区分記号 diacritical mark とはラテン文字につけてもとの字体とは異なる発音を示すための記号で、主なものにウムラウト (ä, ö, ü), アクセント (é, è, ê), セディュー (ç), チルダ (ñ), リング (å), ストローク (ø) などがある。これらの記号はラテン語の植物名には使用できず、修飾された文字に対して必要な書き換えを行うことでその記号を削除しなければならない (第 60.6 条)。

しかしながら、分音記号 (トレマ) diaeresis [英], tréma [仏] だけは使用が許されている (規約の原文では permissible) (第 60.6 条)。分音記号とは連続する母音についてそれが二重母音や黙字でないことを示すために付ける記号で、規約では「母音が前の母音と独立に発音されなければならないことを示す分音記号」と書かれている。やっかいなことに形状はウムラウト記号と同じである (ë, ï, ü)。規約に例としてあげられているミズニラ属 *Isoëtes* の場合、-oe- は二重母音ではなく独立の母音であり、「イソエテス」ではなく「イソエテス」と発音されることを示している。古典ラテン語風に発音するとたいして変わりがないように思われるが、英語風に発音すると二重母音 oe は「イー」のように発音されるので両者はかなり異なる発音となる。トレマの場合には学名にはこの記号をつけてもつけなくてもよい。すなわち *Isoetes* と書いても *Isoëtes* と書いてもいずれも誤りではない。

ハイフン

学名中に使われてよい記号としてハイフン (-) があるが、分音記号がつけてもつけなくてもよい記号であったのに対し、ハイフンはその使用に関して厳密な規定がある。

「合成語の形容語の中でのハイフンの使用は訂正されるべき誤りとして扱われ、ハイフンは削除される。」(第 60.9 条) とあり、基本的には多くのハイフンは削除修正されるのだが、同条文に「形容語が通常独立に用いられる複数の言葉から作られているか、またはハイフンの前後の文字が同じで、ハイフンが許されている場合を除く」とある。前者の例にジュズダマ *Coix lacryma-jobi* (形容語は「ヨブの涙」の意)、後者の例にタシロカワゴケソウ *Cladopus austrosumiensis* (ハイフンの前後の文字が同じ) がある。その他の例については第 60 条実例 20, 21 条をみよ。原綴主義 (第 60.1 条) により、発表時にハイフンが加えられていれば削除対象でないかぎりハイフンは保持され、ハイフンがなく一語にまとめられていればその形を維持することになる。

おもしろいことに、この規定は形容語であるかどうかによって扱いがことになっている。第 60 条付記 3 は「第 60.9 条は (組合せの中の) 形容語にのみ適用され、属またはより高いランクの分類群の学名に対しては適用されない。」と述べている。これにより形容語ならばハイフ

ン削除対象となる合成語を用いた属名 *Pseudo-salvinia* Piton (第 60 条実例 22) はハイフンを保持する (第 20.3 条および第 20 条実例 8 もみよ)。

アポストロフィ

「形容語の中でのアポストロフィ (') の使用は訂正されるべき誤りとして扱われ、アポストロフィは削除される」(第 60.10 条)。属名では 2 語の連結は直接結びつける (第 20.1 条, 第 20 条実例 8) かハイフンでのみ許される (第 20.3 条) ので、学名としてアポストロフィは使用できない。

リンネの使った記号

リンネは植物に関する著作中で、占星術や錬金術で用いられてきたものを含め、さまざまな記号を使用することで記載を簡潔にしている (Stern 1992: 350-351 をみよ)。このうち種形容語の一部としてもちいられたものに ∇ (四大元素の水を表す) と $\text{\textcircled{V}}$ (ヴィーナス, 銅を表す) があり、それぞれハイフンを加えて次の例のように書き換えて用いることが定められている (第 23.3 条)。

Veronica anagallis ∇ = *Veronica anagallis-aquatica* オオカワヂシャ
Scandix pecten $\text{\textcircled{V}}$ = *Scandix pecten-veneris* ナガミノセリモドキ

雑種の記号

雑種は乗法記号 \times を加えて示すことができる (H.1.1 条)。記号自体は学名の一部分ではない (勧告 H.3A.1)。

雑種の両親種の形容語を変更しないまま、または片親の学名の形容語の語尾のみを変更してハイフンで結びつけたものは雑種式 (両親種によりその名の適用が決まる) であり真の形容語 (タイプによってその学名の適用が決まる) ではない (H.10.3 条)。規約にある例を見てみよう。

Verbascum lychnitis L. \times *V. nigrum* L. の雑種を意図した *Verbascum nigro-lychnitis* は雑種式とみなされ、この形容語は真の形容語ではない (H.10. 実例 3)。しかしながら *Micromeria benthamii* Webb & Berthel. \times *M. pineolens* Svent. の雑種 *M. benthamineolens* Svent. は真の形容語をもつ (H.10. 実例 4)。

関連して、真の形容語について、合成語からハイフンを削除する規定 (第 60.9 条)、および雑種分類群の形容語に両親の学名の一部ずつを結びつけることを避けるよう求める勧告 (勧告 H.10A) について注意していただきたい。

栽培植物名

栽培品種の形容語に現代語も使用される栽培植物命名規約 (ICNCP: Brickell et al. 2009) では使ってよい文字ははるかに多い。さらに数字や、記号についてもコンマ (,), ピリオド (.), 感嘆符 (!), スラッシュ (/) などの使用が認められている (ICNCP 第 21.18 条)。

形容語については栽培植物命名規約を参照していただくとして、ここでは雑種の記号のように用いられる接ぎ木キメラを示す加法記号 (+) のみ紹介しておきたい。接ぎ木キメラ属名は

ICBN で正式発表された属名や雑種属名と同じであってはならないと定められている (ICNCP 第 24.3 条)

+*Crataegomespilus* (*Crataegus* + *Mespilus*) 接ぎ木キメラ

×*Crataemespilus* (*Crataegus* × *Mespilus*) 雑種

まとめ

現行の植物命名規約のもとでは学名に用いることのできる文字・記号は、ローマ字 (ラテンアルファベット) 26 文字とハイフンだけであり、必要に応じて分音記号 (トレマ) をつけることが許されているということになる。

Brickell, C. D. et al. (eds.). 2009. International Code of Nomenclature for Cultivated Plants, 8th ed. International Society for Horticultural Science, Leuven.

Stern, W. T. 1992. Botanical Latin, 4th ed. David & Charles, Newton Abot, Devon.

書評 カビ図鑑

細矢 剛, 出川 洋介, 勝本 謙 著 井沢 正名 写真

全国農村教育協会発行

A4 版 160 ページ

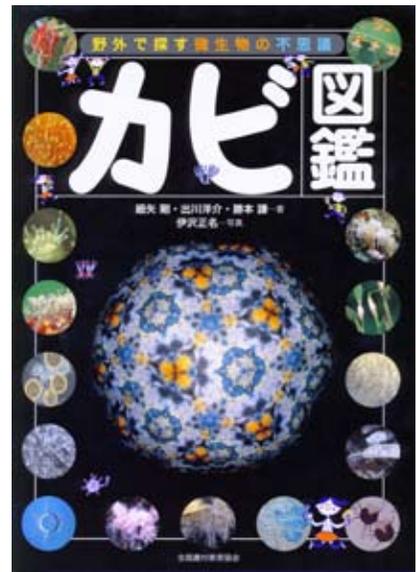
定価 2,500 円+税

ISBN978-4-88137-153-4 C0645

本書の中で紹介されているものは、菌類の中で比較的親近感のある「キノコ」ではなく、あくまで「カビ」です。様々な植物や昆虫をはじめ、きのこや樹液に生えるカビが、ナビキャラクターとカラフルな写真でわかりやすく説明されています。胞子に覆われた昆虫や、カビによって引き起こされた植物の病気など、ドキッとする写真もありますが、ガラス細工のようなイチゴのカビ、キノコにびっしりと毛が生えたようなタケハリカビなど、神秘的なカビの姿も紹介されています。

分解者として自然界に貢献し、ペニシリンやアルコール発酵など人間が利用するものもありながら、一般的にはネガティブなイメージを持たれている「カビ」に対して、もっと親近感を持って欲しいという著者たちの願いが、本書を通じて伝わってきます。後半にはカビの観察方法や写真の撮り方、簡単な培養実験が紹介されており、カビの世界への入門書として、学校の図書室や市町村の図書館に是非置いて欲しい 1 冊です。

(東 隆行)



研究での失敗談

夢中の時にご用心—野外で危険な目に遭わないために—

横田 昌嗣 (琉球大学)

北大の東隆行さんにお会いした時、何か研究にまつわる失敗談をこのニュースレターに書いて欲しいという依頼を受けた。その時は我が身の浅学非才さを顧みず、軽い気持ちでお引き受けしてしまった。そもそも大学に職を得ていること自体が失敗の始まりかも知れないし、その他にも本人の自覚の有無は別として失敗談は数限りなくあるが、他人様にご紹介するほどの話題でもないように思われたので、なかなか筆が進まなかった。本学会の会員の皆さんは、野外調査のため亜熱帯や熱帯に出かけられることも多いだろうと思われるので、少しでもお役に立てるならと考えて、体験談をご紹介しますことにした。

琉球大学に就職して、早いものでもう27年以上が過ぎた。大学院生の頃は北海道から沖縄まで各地を旅行していたが、まさか自分が沖縄に就職するとは、当時は思いもしていなかった。就職してまだ1ヶ月も経たない頃、西表島に採集に出かけた。浦内川を船で遡り、横断道沿いで観察をして、日帰りで船に乗って宿に戻るはずだったが、観察に夢中になって時間がぎりぎりになってしまった上、帰りの船の最終便が人数確認もせず予定よりわずかに早く出発してしまったため、軍艦岩の船着き場に取り残されてしまった。しばらくどうしようか迷っていたが、まだ3時だったので浦内川沿いを下流まで歩いて帰ることにし、川に沿って歩き始めた。その当時既に軍艦岩から星立への道は廃道に近かったため、背丈ほどあるコシダの群落をかき分けたり、アダン林の中を血だらけになって歩いたり、頭に荷物を載せてマングローブの中の支流を泳いで横切ったりしたが、予想以上に時間がかかり、ついに力尽きて途中の稲葉のあ

たりで夜になった。仕方なく山中の崖の上で1泊したが、宿泊のための準備はしておらず、あいにく雨も降り出して、その夜は崖から落ちないように斜面の木にしがみついていたら、一睡もできなかった。送迎客の数が足りないことに後で気がついたのか、渡し船が夜中に探しに来てくれたが、船はエンジンをかけながら目の前を走っていったので、こちらが大声を上げて気付けてくれなかった。西表島の2月は新緑の季節で、蚊がたくさんいるので、体中をこれ以上ないというほど刺されてしまい、その腫れは無事戻った後も2週間以上治らなかった。寺田寅彦も似たような体験を随筆の中で書いていたが、おかげで蚊に刺されても腫れない身体になってしまった。幸い翌日、何とか自力で下山することができた。遭難した状態でも採集品を手放さなかったので、心配して捜索してくださった皆さんから呆れられてしまった。

やんばるや八重山は、小さな島ではあるが地形が単調で、目印になる地形が少なく、小さな谷や尾根が幾重にも重なって非常に複雑な地形を形づくり、登山道はほとんどないので、どうしても自らの判断で道を探して歩くことになる。地形を読み間違えると全く違った水系に下りてしまう場合がある。その後も各地で何回か遭難したが、事なきを得て今まで生きながらえている。今はGPSや携帯電話があるので、自分がどこにいるのかも判るし、助けを呼ぶことも難しくはないので、昔ほどひどい状況にはならないかも知れないが、離島は携帯電話が通じないことも多く、今後も油断は禁物である。

《教訓：遭難してもむやみに動かないで、救助を待つ。》

野外を歩いていて、何回か死にそうになったことがあるが、不思議とそれは全部滝の周辺で起こった。やんばるでは、沖縄県では極めて希なアキカラマツなどを横目に見ながら滝の崖を登っていた時、上にいた同行者が人の頭ほどの石を落としてきて、避ける暇もなくその岩が頭に当たった。悪いことにそういうときに限って、帽子をかぶっていない。おかげで6針縫う怪我をしたが、幸い命に別状はなかった。以後は、必ずヘルメットをかぶるようにしている。西表島では、ヒメヨウラクヒバやヒメカクランなどを見た後で上機嫌で浦内川の支流の滝をさらによじ登っている時、滑り落ちそうになった。その時は、わずか1秒にもならない間に走馬燈のように、子供達の顔や今までの思い出が脳裏を横切った。もう滑落すると観念した瞬間、崖にもう一度しがみついてみたら、何とか落ちずに済んだ。あの瞬間が、これまでで一番危なかったと今でも思う。

《教訓：夢中になっている時こそ、身の安全に注意する。》

琉球列島では、毒蛇のいる島がある。毒蛇がいる島の方が植物相が多様であり、野外調査は毒蛇に出くわす危険を伴う。幸い自分自身では、それほど危険な目にはあつたとは自覚していないが、それでも何回かはハブに出くわしたこともあるし、踏みつけてヒヤリとしたこともある。職場の前任者の一人は、渡名喜島でハブに噛まれて、亡くなっている。琉球列島の陸上ではハブ以外にも危険生物はたくさんいて、ヤマンギと俗称されるクヌギカレハの仲間の幼虫や、ドクガの仲間の毛虫

は、毒針に触れると激痛が走り、動けなくなることがあり、八重山諸島では毒蛇のサキシマハブ以上に恐れられている。急斜面を木にしがみつきながら上り下りする時など、小枝に毒虫が潜んでいることがあるので、山歩きをするときは必ず軍手をするべきである。またアシナガバチ類やスズメバチ類の活動が活発になる夏場の7～8月には、気が立ったハチが攻撃してくるので、それらをむやみに興奮させないように気をつけたいといけな。山道を歩く時や、藪こぎをする時は、ハチが警戒音を立てて周囲を飛び回っていないか、周りにハチの巣がないか気にしながら歩かないといけな。ハチは頭などの急所を狙って攻撃してくるので、帽子をかぶっていないと、髪の毛の中に何匹ものハチが潜入し、刺しまくられることになるので、大変危険である。もちろん林内を歩く時も帽子は必需品である。《教訓：危険生物にはくれぐれも用心する。》

森を歩くスピードは落ちるが、枝を杖代わりにして足下の草むらをたたきながら、足下や樹上にハブがないことを確認して歩くとともに、枝につかまるときは、毒虫がいないことを確認してから手を伸ばして歩いた方がよい。必要以上に恐れる必要はないと思うが、危険生物がいそうな環境については、予備知識を持っておく必要がある。

日本本土と比べると、琉球列島の植物相の研究はまだまだ調査不足で、 α 分類学も終わっていない状況にある。是非多くの研究者の方々に足を運んでいただいて、この地域の研究が進展することを願っている。その際、研究者の安全は第一に優先されるべきものである。

あなたも楽しく記事を紹介してみませんか？

ニュースレターへの情報提供、寄稿大歓迎です。ご連絡は下記まで。

東隆行 〒060-0003 札幌市中央区北3条西8 北海道大学植物園

TEL: 011-221-0066 FAX: 011-221-0664 e-mail: azuma@fsc.hokudai.ac.jp